

「わかってほしい。見えない海の現場の現実」

理 事 澁 谷 直 人

去る2月下旬のある日曜日の夕方、ニュースでホルムズ海峡が封鎖されたという衝撃的な情報を目にしました。これは大変だと慌ててテレビをつけましたが、その時の報道番組で流れていたのはワールドベースボールクラシックの話題ばかり。大谷翔平選手の特集が組まれており、ホルムズ海峡の件は全く報じられておらず、私は拍子抜けしてしまいました。

私がここで申し上げたいのは、これほどの一大事であるにもかかわらず、封鎖当時の関心の低さという事実に対する強い残念な思いです。思えば、私たちの海運業界は、一般の方々にとっては縁遠い、ニッチな世界と捉えられがちです。「船で働いています」と話すと、「漁船に乗っているのですか？」と聞かれた経験を持つ方も少なくないでしょう。ネット番組では「原油が船で運べないなら、飛行機で運べばいい」といった番組を盛り上げる「ネタ」かと思わせる意見さえ見受けられ、この業界がいかに理解されていないかを痛感させられます。

皆様ご存知の通り、日本の輸入品の99%以上（重量ベース）が海上輸送であり、カロリーベースの食料自給率が約38%（令和4年度）に留まる我が国は、海運に大きく依存しています。それにもかかわらず、その重要性が社会全体で認識されていない現状を、私は非常に悲しく感じます。

コロナ禍でのエピソードも思い出されます。ある時、貨物を積んだ船が日本に寄港した際、乗組員の中から感染者が出たことで大きな騒ぎとなりました。その中で、「なぜ今、外国から船を寄港させるのか」といった乱暴な意見が聞かれました。心情は理解できなくもありませんが、輸入品に頼る生活が船員の

労働によって支えられているという事実が、ここでも見過ごされていました。この時もまた、海運業界が社会からいかに注目されていないかを痛感しました。

海運への社会全体の理解を得るため、当協会でも6月25日の「船員の日」の紹介を行っており、日本船主協会、船長協会、全日本海員組合、日本海事広報協会などの業界団体も、社会に海運の重要性の啓蒙を行っておりますが、道は長いようです。

文化人類学に、「他の人々を理解しようと試みること」（ハーバード大学ヌール・ヤーマン名誉教授）が重要だという考え方があります。身の回りのことで精一杯な中で、「海運は自分の生活に関係ない」と感じる方もいらっしゃるかもしれません。しかし実際には、私たちの生活は見えないところで船乗りたちによって支えられています。

今回のホルムズ海峡の一件で、多くの船員が今もペルシャ湾内に閉じ込められています。このような事態は、船員だけでなく、回り回って私たち自身の生活をも脅かすのだということを、実感されたと思います。海運業界に限らず、自分とは異なる世界で働く人々を理解しようと努めること、その試みこそが、今、私たちに求められているのではないでしょうか。

この文章が皆様のお手元に届く頃には、ホルムズ海峡の航行が自由になり、船員の方々も無事に解放され、社会が平穏を取り戻していることを心から祈っております。

